

| | |
|--------------|---|
| Title | 創刊の辞 |
| Author(s) | 天野, 文雄 |
| Citation | 演劇学論叢. 1998, 1, p. 2-3 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/97593 |
| rights | |
| Note | |

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

創刊の辞

われわれの研究室は昭和四十八年の美学科の創設にともなつて昭和五十年に設置された芸能史・演劇学講座にはじまる。この間、美学科全体の研究誌として『フィロカリア』（美への愛）という美しい名の紀要を持つことになったが、研究室の発行になる演劇研究誌はとくに持つことなく今日にいたつた。それが、研究室が開設されて二十四年目にあたるこの時期に創刊のはこびになつたのは、とくに積年の念願成就ということではなく、気がついてみたら、独自に研究誌を刊行するだけの態勢が研究室に整つていた、ということであつた。いわば、機が熟し、当然のことのようにことが成つたのである。名づけて『演劇学論叢』という。

紀要などの研究誌が氾濫といつてもよいほどに多い現代にあつて、しかも大学の一研究室という単位で研究誌を出すことの意味を、あるいはひとは問うかもしれない。しかし、他の領域は知らず、われわれが携わる演劇研究にあつては、あるべき研究に見合うだけの研究誌が出揃つているとは言いがたいのが現状である。それは直接的には、演劇を専攻とする学科なりコースなりが、わが国の大学にさわめて少ないことによるが、究極的にはやはりわが国の学術文化のかたよりというところに落ち着くのであろう。信じがたいことだが、演劇専攻の課程を持つ国立大学はいまだに大阪大学だけなのである。演劇の場合、そうした状況は研究だけではなく、評論にも及んでいるのであつて、先年来、わ

れわれの研究室が劇評誌の『まくあい』を年に二回ずつ刊行してきたのは、現代の演劇をめぐる状況に一石を投じたというもくろみもあつたことだった。このたびの『演劇学論叢』の創刊はもとよりわれわれ自身の研鑽を第一とするけれども、やはり微力ながら演劇研究にたいする一石となることをひそかに期してもいる。また、本誌は研究誌ではあるが、それはおのずから現在の演劇状況とも無縁ではありえない。その意味でも、本誌が演劇を愛する諸賢に広く迎えられ、あたたかい理解と批判によつて支えられてゆくことを切に願うものである。

また、本誌の創刊を機に、昭和五十年の芸能史・演劇学講座以来の研究室の名称を「演劇学研究室」と改めることを、あわせてここに記しておきたい。創設時の「芸能史・演劇学講座」は平成七年の学部改組によつて組織としてはなくなつたため、以後は非公式の名称として「芸能史・演劇学研究室」を用いてきたが、それを「演劇学研究室」に改めるわけである。いうまでもなく、この「演劇学」には、これまでの「芸能史・演劇学講座」と「芸能史・演劇学研究室」がさうであつたように、「演劇」とともに「芸能」が含まれる。意とするところは、これまで以上に「演劇」と「芸能」を一体のものとして、これを「演劇」として把握することにある。もとよりこれは名称だけの問題ではなく、「演劇」と「芸能」の乖離がはなはだしい「演劇」研究の現状にたいするささやかな意思表明でもあるが、ここに創刊される『演劇学論叢』の誌名もそうした理念に立っていることを、あらためて強調しておきたいと思う。

(天野 文雄)